

## 古典複製本使用上の注意

佐々木 勇

### 一、本稿における「複製本」の定義

著名な古典作品には、著者自筆本は、ほとんど遺存しない。よって、前代の文章を書写したものを「複製本」と呼べば、古典文学作品のほとんどは、複製本として伝承されることになる。ただし、原本を転写する際、転写者によって底本本文に少なからぬ改訂が加えられるのが常である(1)。

文学作品以外では、原本のコピーを作成しようとする書写が日本文化を伝承してきた、とも言えよう(2)。近世になると、原本の虫損までも正確に書写した本が出現する(3)。

しかし、本稿では、「複製本」を、原本の写真に基づき製版された印刷本という、現代において一般的かと思われる意味で用いる。

以下、インターネット公開の原本画像が日々増加している現代も、研究上なお活用され続けている複製本について、使用に当たり注意すべき点を述べる。

### 二、二色刷の朱筆

#### 1. 三巻本『色葉字類抄』前田家本

日本語史研究の基本的重要な文献である三巻本『色葉字類抄』前田家本を例に、まず説明する。

三巻本『色葉字類抄』前田家本は、国語史料としての重要さ故、早くから影印出版されてきた(4)。

それに基づく研究が進み、朱筆の声点・合点等を明瞭に区別できる複製が求められた。その要請に応え、次の二本が刊行された。

a. 前田育徳会尊経閣文庫編・三巻本『色葉字類抄』(一九八四年、勉誠社)。

b. 前田育徳会尊経閣文庫編・三巻本『色葉字類抄』(一九九九年、八木書店)。

これらは、墨朱の二色刷である。

勉誠社版の「色葉字類抄 新印の辞」には、「機有らば、更めて朱刷りを入れる影印を」と「久しく考へて来た」と述べられている。八木書店版の「例言」では、「墨・朱二版に色分解して製版、印刷した。」とある。ともに、墨で刷った後、朱刷りを重ねている。その労により、利用者は、朱筆を確認でき、声点を活用した声調研究等をより確実に進められるようになった。

しかし、中には、朱が落ちている、または見えにくい箇所がある。たとえば、次の箇所である(5)。

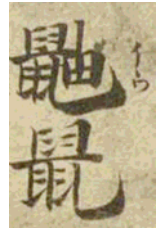
〔勉誠社版〕



〔八木書店版〕

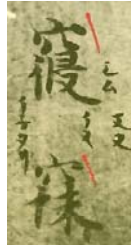


〔尊経閣叢刊版〕

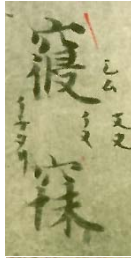


(上4ウ3)

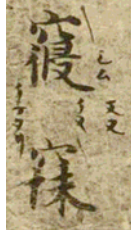
〔勉誠社版〕



〔八木書店版〕

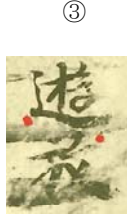


〔尊経閣叢刊版〕



(上6オ7)

〔勉誠社版〕



〔八木書店版〕



〔尊経閣叢刊版〕



(上13ウ1)

①は、上段の勉誠社版では去声点の影は見られるが、朱点にはなっていない。

②は、中段の八木書店版では、下字への合点が小さく、薄い。

③は、八木書店版は「放」の去声点を認めていない。原本でも極く薄い朱点を残すのみである。

いずれの例も、一九二六年に刊行された、下段の尊経閣叢刊版では、朱筆の存在を確認できる。

## 2. 保延本『法華経单字』

保延二年(一一三六)の書写奥書を持つ『法華経单字』は、比較的古い日本呉音資料として活用されてきている。それらの研究は、次の複製本をもとに行なわれることが多い(6)。

a. 貴重図書影本刊行会、一九三三年。

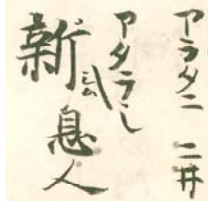
b. 古辞書叢刊刊行会、雄松堂書店、一九七三年。

bの古辞書叢刊刊行会版は、二色刷である。この古辞書叢刊刊行会版の朱筆については、要注意であることが早くから言われている。

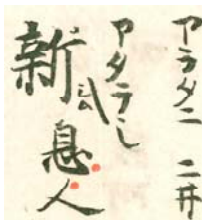
たとえば、望月郁子『類聚名義抄の文献学的研究』(一九九二年、笠間書院)624頁では、「古辞書叢刊刊行会刊の『法華経单字』の朱声点を、貴重図書複製会刊の本のそれと、突き合わせてみると、朱声点の位置に微妙なずれがあり、古辞書叢刊刊行会刊の本の朱声点を、そのまま信用するのは危険である。」とされる。日本呉音研究の専書である小倉肇『日本呉音の研究 研究篇』(一九九五年、新典社)21頁でも、「古辞書叢刊本の朱声点については、それが明らかに脱落している」と認められる箇所が少なからずあるので、「注意を要する。」と注意喚起されている。

具体的には、次のような脱落・不明瞭な朱点が存する。

貴重図書影本刊行会

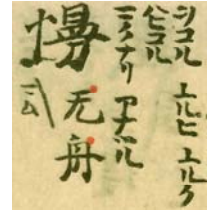
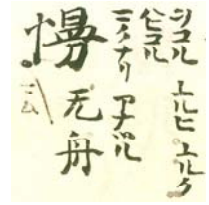


古辞書叢刊刊行会



(4941)

⑤



(3424)

④の古辞書叢刊複製では、右下「ニキ」への朱声点が見えない。

⑤は、右下「ユルク」の朱声点、古辞書叢刊刊行会複製では判然としない。

また、加点位置が、ずれる場合もある。

貴重図書影本刊行会

古辞書叢刊刊行会

⑥



(12121)

⑦



(744)

⑥は、「祖」の去声点、古辞書叢刊本では中央にずれている。

⑦の古辞書叢刊本では、「サカシ」への朱声点がずれ、シに対する上声点がカに加点された平声点に見えてしまう。濁声点(双点)は、つながり、角度も変わっている。

さらに、原本にない朱点印刷されることがある。

貴重図書影本刊行会

古辞書叢刊刊行会

⑧



(7342)

⑧の古辞書叢刊本に見られる「諸」の言偏一画目と二画目との間の朱点は、原本には無い(7)。

このようなことがなぜ起きるのか。

それは、「二色刷」の朱筆は、カラー写真を見ながら手で入れる(8)からである。

加えて、二色刷は、朱点が明確になるものの、「二色刷」であるが故に、朱の濃淡までは区別できない。原本で擦り消している朱も、他の朱点と同じ朱色で印刷される。

①②③の下端に引用した尊経閣叢刊版の「色葉字類抄解説」は、「影印本には所謂局紙を用ひ、原本の朱點朱書も特に色刷とせず黒一色の玻璃版刷とした。幸に一色版の中にも自ら朱と墨との差別が看取される筈である。」と述べる。「玻璃版刷」とは、コロタイプ印刷のことである。

右のような事情で、二色刷複製本は有益であるものの、単色の複製本をも併用する必要がある。

『法華経单字』について、「貴重図書影本刊行会(1933)により古辞書叢刊本(別巻1973 雄松堂書店)の影印本を適宜参照した。」(右引用小倉著書同頁)という複製本利用法が望ましい。

三、再複製による画質低下

では、単色の複製本を出し続けるのがより良いかといえば、そうとも言えない。ここでは、コロタイプ版を再複製したために、細かな点が見えなくなった例を挙げる。

『色葉字類抄』の初期状態を留めるとされる石川武美記念図書館(旧お茶の水図書館)蔵『節用文字』には、次の複製本が有る。

- a. 古典保存会、一九三二年。
- b. 白帝社、一九六二年。

b 白帝社版は、a 古典保存会版の再複製である。

白帝社版は、再複製したことによって、画像の解像度が落ちている。あるいは、意図的に削除したかと思われる訓点も存する。

この点も、先学によって注意されるところで、島田友啓編『節用文字假名索引』(古字書索引叢刊、一九六三年)は、「この索引は古典保存会複製本(昭和七年一月刊)を底本として作成いたしました。白帝社複製本(昭和三十七年三月刊)を利用されるときは、補訂表により訂正戴きたい。」として、五十五項目の「補訂表」を掲げている。入手困難とはいえ、古典保存会の複製本を利用するのが良い。

左に、古典保存会複製本に依つても判定に迷うと思われる声点加点点例を一覧する。すべて、原本によって確認済みである。国の重要美術品である原本の閲覧を御許可下さった石川武美記念図書館御当局に、心中より御礼申しあげる。

〔漢字への声点加点点例〕

(白帝社版では全く見えない声点に傍線を引く。次項の仮名への声点でも同じ。・は、仮名声点と同じ星点であることを示す。：は星濁声点である。単に(平)などと記したものは、圈声点である。)

- 尊(平) (1才2) 偷(平) (1才7) 繡(去) (1ウ2) 欵(去濁) (1ウ3)
- 茵(平) 芊(去) (2ウ7) 楓(平) (3才1) 鶯(平濁) (3才6)
- 伯(入) 母(上濁) (3ウ5) 己(上) (3ウ6) 鼠(上) 弩(平) (4ウ7)
- 排(平) 却(入) (6ウ4) 山葵(平濁) (8才4) 「水荷」(上)
- 醬(8才5) 木(入濁) 夫(平) 蓼(上) (8才5) 俛(去) 子(上) (8ウ2)
- 胡(平濁) 臭(去) (8ウ4) 瘡(入) 慳(平) (8ウ4) 絮(上濁) (9才5)
- 鸞(入) (9才6) 「往」反(上濁) (10ウ7) 「往」還(平濁) (10ウ7)
- 和(上) 儂(上) (11才1) 衙(平濁) (11ウ2) 窳(平) (11ウ3)
- 檻(去) 欄(平) (11ウ4) 雁(去濁) 齒(平濁) (11ウ5) 鏃(上)
- 管(上) 竹(12才1) 衛(去) 矛(平濁) (12才1) 劇(入濁) (12才3)
- 骨(入) 蓬(平) (12才4) 芘(去濁) (蘭) (平) (12才5)
- 草(平) (12才7) 草(平) (12才7) 賣(平濁) 子(上) 木(12才7)
- 榲(上) (12ウ1) 榛(去) (12ウ1) 腹(入) (12ウ2) 枳(上) 棋(上)
- 參(平) 椽(平) (12ウ2) 吳(平) 朱(平) 黃(12ウ3) 李(上)
- 衡(平) (12ウ3) 殼(入) (13ウ4) 巫(平濁) (14才1) 覲(入濁) (14才1)
- 列(入) 卒(入) (14才3) 髭(平濁) (14ウ2) 癰(入) (14ウ4)
- 粥(入) (16才2) 糜(上) (16才2) 鑰(入) (17才1) 答(平) 箒(平) (17ウ2)
- 棹(去) (17ウ4) 牝(平濁) (柯) (平) (17ウ5) 行(平) 障(平濁) (18才3)
- 昇(去) (19ウ2) 忸(入濁) (忸) (去濁) (22ウ7)
- 雅(上濁) (音) (平) (23才3) 肝(瞻) (平濁) (23才4) 幹(去) (了) (上) (23才5)
- 傲(去濁) (僑) (上) (23才5) 涯(平) (岸) (23才5)
- 涯(平) (分) (去) (23才5) 簡(上) 定(平濁) (23才6) 苛酷(入) (23ウ1)
- 加(去) (茶) (上濁) (23ウ3) 確(入) (平) (24才2)
- 遐(平) (迹) (上濁) (24ウ7) 柳(去) (26才4) (津) (平) (頤) (平) (26ウ3)
- 贖(入) (28才4) 歐(上) 吐(上) (28才4) 諾(入濁)

(28ウ3) 醜(平濁) (29才6) 欄(去) (29ウ2) 絡(入)「土朱」(上  
 (29ウ6) 踏(去輔) (去) (30才1) 鑽(平) (30才1) 斃(去) (31  
 才4) 彷彿(平・徨) (平) (33才1) 懦弱(入濁) (33才4) 拏(平濁) (33  
 才4) 攪(入濁) (33才7) 大(去)漸(上濁) (33ウ1) 避(去濁) (返) (去) (33  
 ウ4) 「燕鳥」(去)豆(去) (36才4) 觚(平) (稜) (平) (38才2)  
 佃(去) (39才2) 窖(去) (39才3) 築(入)墻(平) (39才4) 蹄(平  
 ・漏) (去) (40才3) 孳(去)尾(上) (40才3) 壅(去) (41才1)  
 角(入)弓(41ウ2) 属(入)鏤(平) (41ウ3) 颯(去)縷(平) (45才6)  
 菌(平)茹(平濁) (46才3) 壅(去) (51才4) 難(平)澁(入濁) (52  
 才3) 難(平)口(上濁) (52ウ4) 麦奴(平濁) (55才1) 鱧(平  
 濁)魚(55才3) 聾(去) (55才7) 腎(去) (55ウ2) 駢(平)梅(上  
 ) (55ウ3)

〔仮名への声点加标点例〕

(仮名への声点は、基本的に星点であるため、・の標示を省略する。  
 圈点の場合は、○で示す。○は、無加点を示す。たとえば、「ヲトス(上  
 ○平)」は、「ヲ(上)トス(平)」と加点されていることを示す。)

〔威〕ヲトス(上上濁平) (4才4) 〔饑〕ヲホク(上上平) (4才5)  
 〔櫛〕ヲトス(上○平) (4才6) 〔苑〕ワカス(上上濁平) (9ウ  
 4) 〔衛矛〕カハクマツ、ク(上上上上上平) (12才1) 〔薺〕  
 カ、ミ(平上上) (12才5) 〔穎〕カヒ(平平) (12ウ4) 〔王不留  
 行〕カモクサ(上上上上平) (12ウ6) 〔紆〕カタム(平平濁○) (15  
 才4) 〔諸〕カタエ(平上上) (15才6) 〔瘠〕カフ(上濁)上  
 イ(平濁) (16才6) 〔鉸〕カコ(平去) (16ウ4) 〔滓〕カスト  
 ル(○○上濁○) (18ウ6) 〔絡〕カラク(平上濁) (19才4)  
 〔買〕カフ(上上) (19ウ1) 〔禿〕ツフ(上平) (19ウ7) 〔鱗〕

カラメク(上濁○○○) (20ウ2) 〔嫁娶〕トツク(去上平軽濁) (23  
 ウ2) 〔雅意〕カイ(去濁平) (23ウ4) 〔綿悽〕カツカツ(上平  
 平平) (24才3) 〔仗〕タナヒタリ(上上平濁平○) (28ウ3)  
 〔狂〕タフル(○上濁○) (29才1) 〔擲〕タイ(平濁上) (29ウ4)  
 〔攤宿〕タスク(上濁平平軽) (30才6) 〔欠〕タラス(○○平濁)  
 (30ウ4) 〔淡〕タム(平濁去) (31ウ4) 〔拂〕タハル(上平平)  
 (32ウ2) 〔谷上〕タナカミ(○○平濁○) (34ウ1) 〔鍛〕ソク  
 (平上濁) (37才6) 〔及巳〕ツキネクサ(上上上○○) (39ウ4)  
 〔鶉〕ツフリ(上上濁○) (39ウ6) 〔認〕ツナク(平平上濁) (41才  
 3) 〔賃〕ツク(上上) (42才1) 〔冠〕ツフ(上平軽濁) (42ウ5)  
 〔認〕ツナク(平平○) (43ウ2) 〔征〕ツム(平上) (43ウ3)  
 〔措〕ツ、ム(平○○) (44ウ3) 〔挫〕ツ、ク(上○上濁○平○)  
 (44ウ4) 〔勞〕ネキラフ(上上)上濁イ(上平) (47才1) 〔登〕  
 ナル(平平軽) (50ウ1) 〔抵〕ナク(平上濁) (51ウ1) 〔初〕ナ  
 フ(平上) (51才1) 〔壅〕ナ、ム(平○上) (51才4) 〔擾〕ナツ  
 ク(平平上) (51才5) 〔狎〕ナル(平上) (51才5)

四、高精細カラー版

以上のごとき問題を解消するため、高精細カラー版の複製本が刊  
 行されはじめた。

『西大寺本 金光明最勝王経 天平宝字六年百濟豊虫願経』・京都  
 国立博物館所蔵『国宝 浄名玄論』『吉田本 日本書紀』『岩崎本  
 日本書紀』『キリシタン版 日葡辞書』などの著名文献のカラー複製  
 本が既刊である。『国宝 史記』『国宝 古文尚書』『重文 ドチリー  
 ナ・キリシタン』等の「東洋文庫善本叢書」、『国宝 冥報記 全三  
 卷』『重要文化財 弥勒上生経 (石川年足願経)』を収める「高山寺

の名室」の高精細カラー写真複製シリーズも刊行中である。

高精細カラー版・新天理図書館善本叢書・第一期も、『日本書紀乾元本』から刊行開始された。古くから研究され、頻繁に参照・引用される『類聚名義抄』（観智院本）の高精細カラー版は、二〇一八年六月からの刊行予定である。発刊が待たれる。

それぞれのパンフレットや解題で説かれるとおり、高精細カラー複製本であれば、原本調査とほぼ等しい研究が可能である。自らの手で時間をかけて閲覧できること、精細画像を拡大・加工・抽出可能であることは、原本調査より勝れた点であろう。

しかし、当然ながら、原本の装訂や紙質は、原色・原寸の高精細カラー版影印といえども変更されている。

卷子原本が、洋装冊子本として複製されることによつて、原本の卷子本を想像しつづつ読解する必要がある。虫損か否かの確認、紙背注の本文対応箇所を特定する場合、などである（9）。

また、原本の素材・料紙は、本文書写の厳密度・使用字体・異体字率等と相関する（10）。

なお、これも当然のことながら、高精細カラー版影印も、人が撮影した写真を、人が編集する。そのため、撮影漏れや編集時の誤りは、避けられない。

たとえば、次の例が有る。

京都国立博物館編『国宝岩崎本日本書紀』（二〇一四年、勉誠出版）の高精細カラー版影印は、大阪毎日新聞社編『秘籍大観』（一九二七年）のコロタイプ版、日本古典仏学会編『複製日本古典文学館 日本書紀』（一九七二年）の二色刷版と比べ、原本にはるかに近く、紙の天地・紙継の様子まで知られる優れた複製本である。当該文献の今後の研究は、この複製本に基づくべきである。

しかしながら、巻第二十二推古紀11行目「刹柱」に対する「御塔心柱也」の裏書、および73〜75行目の裏書が、複製されていない（11）。

## 五、むすび

日本には、多くの古典籍が現存している。日本在住の研究者には、その古典籍を研究資料として公開することと、その古典籍を活用した研究を発信することが、世界の研究者から求められている。

その要求に応え、数多の貴重古典籍の中から、とりわけ研究価値の高い文献を選び、複製本が刊行されてきた。また、近年では、鮮明な画像がインターネット上で公開されている。これらの複製本の公刊、画像公開のための先人の熱意と御苦労に、心から感謝したい。

これらの複製本および公開画像に依拠して、日本の古典研究・言語文化史研究は、大きく前進してきた。

今後も、先人の学恩に報いるため、複製本・画像を最大限に活用しつつ、なお不明の点は原本を閲覧することによつて、従来の知見を改新していく必要がある（12）。

本稿では、複製本を使用する際に注意すべき点を簡略に述べた。

最後に、原本に増える研究資料は存しないこと、だからこそ、その原本を永く伝えるための努力を研究者も続けるべきであることを記して、本稿を結ぶ。

## 注

（1）青谿書屋本『土左日記』が貫之自筆本の完全複製本とも言えるものであることが実証され（池田亀鑑「土左日記原典の批判的研究」『古典の批判的處置に関する研究』第一部、一九四一年、岩波書店）、その後、青谿書屋本が為家自筆本の完全複製本であることが示された（萩谷朴「青

谿書屋本「土佐日記」の極めて少ない独自誤謬について」(『中古文学』41、一九八八年五月)、『土佐日記』は、その数少ない例外である。なお、片桐洋一「『土佐日記』定家筆本と為家筆本」(『國文学』77、一九九八年三月)、依田泰「『土佐日記』定家本と為家本に関する一考察」(『学習院大学国語国文学会誌』43、二〇〇〇年三月)、伊井春樹「為家本『土佐日記』について」(『中古文学』71、二〇〇三年五月)も、参照のこと。

(2) 写経生の忠実な写経によって、中国では多くが失われた隋唐の経本文が日本に残った。日本の宗教者の著作も、自筆本との区別が難しい程に、弟子達によって正確に写された。親鸞の自筆本とされていた西本願寺藏『教行信証』や専修寺藏『三帖和讃』が自筆ではないことがわかったのは、さほど古いことではない(『親鸞聖人真蹟集成』(法蔵館)の解説参照)。漢籍の書写でも、室町時代後期の清原宣賢に至るまで、家の証本を残そうとする姿勢に変わりはない。古記録も、他家の記録までもが借出書写されたことで、多くの家の記録が伝存している。

(3) 前田家本を書写したと考えられている黒川本『色葉字類抄』、寛喜二年(一二三〇)書写本を転写した尊経閣文庫蔵前田家本『三宝絵』、楊守敬旧蔵国立故宮博物院藏『蒙求』を書写した宮内庁書陵部蔵本など。観智院本『類聚名義抄』等の貴重な古典籍を原本のままに後世に伝えようと書写した正宗敦夫編『日本古典全書』の『諸家傳』『地下家傳』『節用集』『類聚名義抄』などの人名録・古字書も、この延長線上に立つ大事業であった。

(4) 尊経閣叢刊(一九二六年、育徳財団)、『色葉字類抄研究並びに索引』本文編(一九六四年、風間書房)。

(5) 本稿はモノクロ印刷であるため、朱筆は複製本で確認頂きたい。なお、広島大学リポジトリには、本稿の画像をカラーにした原稿を掲載する予定である。

(6) 原本は、現在、センチュリーミュージアムの所蔵にかかる。

(7) 斯道文庫に寄託中であるセンチュリーミュージアム蔵の原本を閲覧させていただき、確認した。センチュリーミュージアムおよび斯道文庫御当局に、御礼申しあげる。

(8) 勉誠社刊・三巻本『色葉字類抄』の朱筆について、勉誠出版の吉田祐輔氏からご教示いただいた。法蔵館の『親鸞聖人真蹟集成』の朱筆も、旧版・新版とも、手書きされたものである。これは、浄土真宗本願寺派総合研究所にいらした三栗章夫氏にお教えいただいた。

(9) 小助川貞次「影印本環境における訓点研究の問題点」(『富山大学人文学部紀要』第64号、二〇一六年二月)、参照。

(10) ジャン・マビヨン著・宮松浩憲訳『ヨーロッパ中世古文書学』(二〇〇〇年、九州大学出版会)、石塚晴通「東洋のコデイコロジー(Codicology)」(二〇一二年八月三十日〜九月一日、東洋文庫講習会)、参照。

(11) この二点の裏書きは、先に出版された複製本には影印されている。そのため、先行複製本も、未だ必要である。

(12) 本稿で採り上げた『節用文字』は、後半に星声点(・や・)が集中し、仮名字体も前半と後半とは異なる。その理由が、原本調査によって知られた。原本閲覧によってこそ判明することからの一例である。これについては、本稿の主題外であるため、別稿で述べる。

(広島大学)